

〔一〕 次の一線のカタカナを漢字になおしなさい。

- 1 災害にソナえる。
- 2 真剣にシヨウブする。
- 3 デントウのある校風。
- 4 ゴミをジヨキヨする。
- 5 発言をゴカイされる。
- 6 彼のタイドは立派である。
- 7 エンソウカイが開かれる。
- 8 教育制度がカイセイされた。
- 9 オウフクで一時間かかる道のり。
- 10 希望していた会社にシユウシヨクした。

て生まれた性格があります。個として生きることには立ち戻り、自分の土地を見つけて開拓していくのですから、わざわざ自身を変えようとしてよいのです。

むしろ、自己変革をしようなどという考えは捨ててもらった方がいいとボクは思っています。昨日と違う自分という言葉はいかにも前向きですが、処世術や行動が変わることはあっても、人の中身はそう簡単には変わらないものだと思っています。この世に生まれてきた自分を最大限に花咲かせること。そのためには自分を否定して変えようとするのではなく、あるがままに受け入れてやることから始めた方がいいと思います。無理に明るく振る舞うことも、善人を目指す必要もありません。自身の内なる世界で息づいている言葉の森。これをしっかりとらえ直すことが始まりです。

B、プチ革命のために心を見つめるとは、自身が使う言葉についてあらためて目を見開いていく行為を意味します。これがプチ革命の入り口です。そこから革命の準備は始まります。

では、その具体的方法とは？

ここから先はボクの経験と、言語学の基礎をあわせて紹介します。

前世紀の終わりから今世紀の初めにかけて、ボクはニューヨークで暮らしました。知人一人いない街に飛びこんだのですから、当初は崩れ落ちそうになるほどの孤独にさいなまれました。それでも三年近くの間、あの街でやってこられたのは、数人の友人ができたお陰だったと思います。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たった一人のプチ革命。それを遂行するのは自分の心です。では具体的にどうやってボクらは自分の内側を見つめ、なにをつかみ、どう耕していくべきなのでしょう。そしてその行為は、生き甲斐のある人生とどう関わっていくのでしょうか。

言葉。言の葉。あなたの心のなかで生まれ、繁茂していく認識の一片ずつ。

言葉はいたるところにあふれていますが、そのみなもとは人の内側です。すべてそこからやってきます。口から出る前、あるいはペン先やキー操作で文字に変わる前はそこには棲息できません。心と言葉を切り離すことはできないのです。

A、心に風が吹く時は、言葉も乱暴にそよぎます。心のなかに意地悪の種がある時は、言葉まで意地悪な色に染まります。心に温かな日溜まりがあれば、言葉にもぬくもりが宿ります。また、逆も言えるかもしれません。言葉を明るくしてやれば、心も明るくなっていくはず。哀しい時は歌いなさい。つまらない時は楽しい話をしなさい。そうすれば心にも元気がよみがえるよと、多くの人が主張していますね。<sup>(1)</sup> 正しい見方だと思います。プチ革命も実はその原理にのっとります。ただ、目的はそこではありません。流行の自己啓発を指すものではないのです。世間的には明るい人の方が好かれるのですが、人には持つ

す。結果的には日米混成のバンドを組め、ニューヨークのいくつかのライブハウスで歌えたことは良い思い出になっています。ただ、人は調子に乗るもので、やっているうちに欲が出てきて、ニューヨークで結成したこのバンドを日本でデビューさせようという話になりました。

問題はベージストでした。彼はアメリカ人だったので、日本での彼の居住や査証をめぐってさまざまな問題が起きました。それだけに、日本で暮らす覚悟を決めてくれたベージストに対し、ボクらは深く感謝をしました。彼が来日してすぐ、知っている寿司店に連れていったのも、歓迎の気持ちからです。

そこで言葉に関し、とても印象的なことが起きました。

ベージストにとつて、日本の本格的な寿司店に入るのは初めてのこと。カウンター席に座った彼はなにを注文していいかわからず、ガラスの保冷ケースに入った寿司ネタをおおずと指さします。ボクはいちいち、それはカンパチというんだよ、それはハマチ、それはサバ、それはアジ、といった具合に魚の名前を言っていました。

彼はずいぶんと食べました。回転寿司ではないので大奮発です。でも、「おいしい」と日本語で連発してくれたので、こちらの気分も盛り上がりました。ところが、寿司店を出てしばらく歩いてから、ベージストはいきなりこう言ったのです。

「なんで日本人は、魚にいちいち名前をつけるんだよ？」

ボクは「え？」と聞き返しました。その時の彼の反応がこうです。

「フィッシュ・イズ・フィッシュ（魚は魚だろ）」

次回からは回転寿司でいいやと思いましたが。つまり彼は、寿司ダネの区別がついていなかったのです。魚は魚でしかなかったのです。

たしかに、アメリカ人は日本人ほど魚の種類を知りません。ニューヨークの寿司レストランでも、経営者が日本人ではない場合は、カンパチやハマチやツムブリを一緒いっしょにイエローテール、マグロもカツオもまとめてツナと言っている店がほとんどです。多くのアメリカ人にとって、イエローテールという魚は存在しても、カンパチやハマチは存在しないのです。ましてやそのハマチが成長具合によってワラサやブリと名が変わる出世魚だなんて、説明したところで「？」という表情になるだけです。

このベアシストの一件は、言葉とはなにか？ という問いかけに対して、ほとんど答えにも近いようなヒントを与えてくれているように思います。

人間は区別がつかないものに対しては、呼び名を持ち得ません。区別がついている事象に対してのみ、呼び名を持つのです。

その考えをあてはめると、感情に対して三つの言葉しか持てない人は、三つの感情しか区別がつかないと言えます。嫌悪けんおの感情が全部「むかつく」になってしまうのであれば、その人にとってはたった一種類の怒りいかしか存在しないこととなります。逆に、揺れ動く心に対して百の描写びやうができるなら、その人はそれだけの心の姿の区別がつくのです。

たは毎朝、何本の木に出会いますか？ そのそれぞれの区別がつかますか？ たとえば並木の一本だけを取り出したとして、それがどこに植えられていた木なのかわかるでしょうか。

おそらくは「いいえ」という答えが返ってくるでしょう。並木全体は認識できても、その一本ずつは区別してはいけません。すべての木は形が違うのに、差違さざいをとらえられていない。物体としての分け隔へだてがないのです。独立してはいない。だから一本ずつに対しては呼び名もない。

しかし、これが並木ではなく、人間だったらどうでしょう。木の代わりに人が立っていたら？ いえ、そこまで考えなくても、入学や転校で新しい仲間たちと出会った時のことを思い出して下さい。さすればけっこうです。何十人、あるいは何百人もの新しい仲間たちが現われた時、最初はだれがだれだと区別がつかみませんから、当然、名前も覚えられません。しかし、数ヶ月もすれば、すくなくともクラス全員の名前ぐらいはわかるようになるものです。それは等しく、全員の差異がわかるようになったからとも言えるのです。

周囲のものや事象、それぞれに対する差異の発見。それが形状からくるものであれ、性質からくるものであれ、言葉が誕生したのはまさにその部分からです。一見、言葉はものへの「対応」にその由来を持っているようなイメージですが、もともと根本的なところは認識上の「違い」であり「差異」であったのです。

ところで、ボクらはどういうシステムでひとつひとつの言葉を吸収し、

言語とはすなわち、区別がつくかどうか。差異に根ざした表現なのです。

わかりやすい例をあげましょう。

日本には、雨に対する呼び名がたくさんありますね。「霧雨きりさめ」「こぬか雨こぬかあめ」「にわか雨にわかあめ」「五月雨さみだれ」「お天気雨おてんきあめ」「夕立ゆふだち」「通り雨どおりあめ」「ゲリラ豪雨ゲリラあめ」といったふうです。雨が多く、四季に恵めぐまれた国土だけに、ボクらはその区別がつくのです。だからこれだけの呼び名が生まれました。では、欧米おふいではどうでしょう。たとえばカリフォルニアやニューメキシコで「雨の表現はいくつありますか？」と訊きいても、それはあまり意味をなさない問になるはずですよ。まったくもって、あちらでは雨は雨でしかありません。せいぜいが「ヘヴィー・レイン（激しい雨）」や「シャワー（にわか雨）」といった程度。言い方はありますが、雨に対する細分化がない土地では、その言葉数もぐつと減るのです。

まさに、Cが言葉を生みみなもとであるわけです。

では、差異は初めから対象に用意されているものなのでしょうか。

そうだとも言えるし、そうではないとも言えそうです。これもまた、ボクらの内側が「差異がある」と、とらえられるかどうかにかかっているようなのです。

C、並木を考えてみて下さい。あなたの家のそばにも並木はありますよね。ケヤキやサクラのように、樹木の名ぐらいはあなたにもわかると思います。でも、それ以上のことになるとどうでしょう。あな

それを自分の表現の道具として話したり書いたりできるようになったのでしょうか。

たとえば、モンシロチョウという蝶ちょうの名前を覚えた時、いったいボクらにはなにが起きたのでしょうか。

ほとんどの人は幼児の頃ころ、その蝶が飛んでいくのを見て指をさし、「ああ……」と声をあげたところで、親や親戚しんせきのおじさんなどが「あれはモンシロチョウというんだよ」と教えてくれたのだと思います。目の前をひらひら飛んでいく白い蝶。大きなアゲハチョウや黄色のモンキチョウとはあきらかに違う生き物です。ここで、目でとらえたモンシロチョウと、差異を示すために与えられたモンシロチョウという名詞が合体し、ひとつの存在として認識されていくようになります。

では、大人たちが蝶に対していつさいの興味を持たず、幼児がモンシロチョウを指さしてもなにも言ってくれなかった場合はどうでしょう。

おそらく、この子がモンシロチョウという蝶の名前を覚えるのはもうすこしあとになります。しかし、たいていは友達などが教えてくれて、目でとらえた差異とそれを示す名詞の合体という同じ反応が起きるので。ただ、時にはこんな例も考えられます。それは友達どうしの会話のなかで、モンシロチョウという名詞が先に出てきて、本人がその実体をつかめない場合です。素直すなおに、「モンシロチョウってなに？」と訊ける人なら、次に蝶が飛んでいる時に友達が教えてくれるかもしれません。名詞が先に記憶きおくに残り、あとで差異を理解するという経験です。

では、他人に尋ねる<sup>たず</sup>勇氣がこの子になく、「モンシロチョウってなんだろう？ 今さら訊けないし」と胸のなかに疑問をしまいこんでしまった場合はどうでしょう？ この子は家に帰ってから<sup>ずかん</sup>図鑑を広げたり、ネットで調べたりするかもしれません。そしてこの独自の経験を通じて想像をふくらませ、ひよっとして春になるとひらひら飛んでいるあの小さな白い蝶のことなのかな、とイメージの上での差違と名詞を結び付けるのです。

どの言葉の覚え方が正しい、ということではありません。ボクがここで言いたいことは言葉の覚え方にはいくつものパターンがあるということなのです。

たいていの場合、ボクらは日々の経験を通じて言葉を覚えてきました。幼児から少年期にもっとも多くの言葉を覚えますから、ものを初めて見る、差違を知る、言葉を知って認識できるようになる、という受け身の姿勢での吸収がほとんどです。しかし、理科や社会の教科書を読んで勉強する<sup>(5)</sup>時のように、言葉がまずきつかけになって差違を理解していくというパターンもあります。モンシロチョウという名だけを知り、あとで図鑑を開くタイプですね。これもまた、言葉の森の木々を増やしていくひとつの方法なのです。

ボクらの胸にある言葉の森は、さまざまな経験によって一本ずつ木々が増え、徐々に大きくなってきたものです。親が教えてくれた言葉。友達と遊ぶなかで覚えた言葉。好きな小説で知った言葉。参考書で一生懸

問一 本文中の  A  C にあてはまる言葉として最も

適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。  
ただし、同じ記号を二回使ってははいけません。

- ア もし                   イ あるいは                   ウ たとえば  
エ だから               オ しかし                   カ つまり

問二 — 線(1)「正しい見方だと思います」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 言葉に関心を持たないと心も貧しく、他人に対して意地悪になるということ。  
イ 言葉をたくさん知ることによって人間性がみがかれて、豊かな心を持つということ。  
ウ 言葉の力を身につけることで、心をコントロールすることができるということ。  
エ 言葉は心の中で生まれるもので、心と言葉は分けることができないうこと。

オ 言葉は世界の至る所にあるので、心掛け次第ですぐに見つけられるということ。

命に覚えた言葉。本当に必要なのかと疑いながらもひとつでも多く覚えようとした英単語などもそうです。

プチ革命は、この言葉の森に、あえて自分で選んだ一本の木を植えてみるという行為が始まりとなります。意識的に、自分の好きな木を植えるのです。

ここが肝心なところですよ。

受け身で覚えるのでもない。勉強だからと仕方なく頭に入れるのでもない。自分の好きな木を植えて、心のなかに言葉の葉を繁<sup>しげ</sup>らせていくのです。

(ドリアン 助川 『プチ革命 言葉の森を育てよう』)

※1 処世術Ⅱ生き方

※2 査証Ⅱ証明書類

問三 — 線(2)「目的はそこではありません」とありますが、筆者は「目的」をどのようなことだと考えていますか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 新たな目標を見つけて、前向きに生きていくこと。  
イ 知識を増やすことで、上手に世の中を渡<sup>わた</sup>っていくこと。  
ウ 一人一人の個性を大切に、それを十分にのばしていくこと。  
エ 過去の自分の弱さを反省し、強く生まれ変わっていくこと。  
オ 自分のやり方を貫<sup>つらぬ</sup>き通すことで、長所を増やしていくこと。

問四 — 線(3)「自分の土地を見つけて開拓していく」とありますが、

これはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 多くの人と接して、楽しめる自分になること。  
イ 本当の自分を見つけ、成長させていくこと。  
ウ 本物の自分になるため、挑戦<sup>ちっせん</sup>すること。  
エ 心の大きな人間を目指していくこと。  
オ 誰<sup>だれ</sup>にも負けない強い自分になること。

問五 本文中の□にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 四季に恵まれている点
- イ 差異がわかること
- ウ 人びとの考え方
- エ 地域の特徴
- オ 言語の個性

問六 — 線(4)「これが並木ではなく、人間だったらどうでしょう」とありますが、筆者がこの例を通して言いたいのはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

- ア 人や物につけられた様々な名前を覚えることで、その差異に気づくことができるということ。
- イ 自然をないがしろにするのではなく、小さな木々にも愛情を持って接していくべきだということ。
- ウ 一人一人の人間に対してはその差異を見出すことで、それぞれの呼び名を理解しているということ。
- エ 日常生活の中であまりにも多くの人々と会っているため、それぞれの違いを理解することができないということ。
- オ 人は木のように個性のない単純な存在ではなく、一人一人がかけがえのない才能や考えを持っているということ。

### 〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ドアをあけただけで、ガンガンはいつてくる太陽が、もうすっかり夏の色をしている。

手でひさしをつくりながら、足がサクサクとまえにでていくのが、気持ちよかった。最近はずもあまりふらなくなった。もうすぐ梅雨が明けのかもしれない。

教室にはいると、愛海が、不安そうにウロウロしてる。

「愛海ちゃん、おはよう。どうかした?」

「美雨ちゃん、わたしのペンケース、見なかった?」

「どんなのだっけ?」

「えっと。花柄で」

「あ、あれ? 入学のお祝いにお母さんに買ってもらったって言ったって、こくんとくなく。」

入学した当時、名前のあいうえお順に端からつめてすわったとき、わたしが神崎で、愛海が石川で、ちょうどとなりの席になったことがある。「ペンケース、かわいいね」って、話しかけたら、こぼれるように、笑った。よっぽど、大切なんだろうな、って思った。

「それが、ないの?」

「たしかにきのうまでは、あったの。でも家に帰ったらなかった。だから、しまいわすれたんだな、って思って学校にきたら、どこにもないの」

問七 — 線(5)「言葉がまずきつかけになって差違を理解していくというパターン」とありますが、これと同じ内容が書かれている部分を本文中から二十六文字でぬき出して答えなさい。ただし、初めと終わりの三文字を答えること。(句読点などの記号も一文字に数えます。)

問八 本文中の内容にあてはまるものとして最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 受け身で言葉を覚えていっても言葉の森は育たない。
- イ 日本語の知識を理解することの重要性を強調している。
- ウ アメリカ人は日本人ほど魚の重要性を理解していない。
- エ まず初めに差異に気がつかないと言葉の習得はできない。
- オ 言葉を豊かにするためには自分の心と向き合うことが必要だ。

問九 「プチ革命」を実行するために、筆者は何をすれば良いと考えていますか。本文全体をふまえて説明しなさい。

「落としたのかな」

「あ、じゃあ、あとで落とし物の箱、見てくる」

そう言いながら、つらそうな顔をした。

「じゃあ、いっしょに行つてあげるよ」

わたしまで、つらくなってきた。そして、そう思っている自分に気がついて、すこしおどろいた。

まえたつたら、愛海がこまっているときいても、他人事(ひとこと)しか思えなかったのに。いっしょにさがしてあげたいと思ったのは、どうしてだろう。

「ちゃんと見つかるといいね」

玲央(れいお)に報告しておいたほうがいいよね、クラスできいてくれるかも。そんな話をしたばかりだったのに。

放課後、ひとがまばらになった教室で、桃花(ももか)が、とつぜん、「ジャ〜ン」

と言った。

意地悪っぽい目をして、千佳(ちか)と玲央、里美(りみ)に目くばせしてる。

え、なに、わたし、なにかした?

ふんふんと、鼻歌まじりのごきげんなようすで、カバンからとりだしものを見て、思わず声をあげてしまった。

A 「あ! そのペンケース」

桃花(ももか)が楽しそうにちろっと舌をだした。

「つてか、美雨ちゃん、これ、だれのか知ってるんだ？」

「たぶんだけど、愛海ちゃんでしょ？」

「へえ！」

「どこにあったの？ よかった、愛海ちゃん、ずっとさがしてたから……」

「これ、ひろったの。そうかあ、やつぱ愛海ちゃんのか」  
意味ありげにうなづく。

**B** 「それきいたら、ますます返せないなあ……」  
え？

千佳が桃花の手から、ペンケースをさつととると、中から一枚の紙切れをとりだした。

**C** 「ちよつと読んでみてくれる？ これ」  
なにかのメモだった。わたしは書いてあるまま、読みあげた。

「花ワル× 雨○ 今度先生に言う？」

「つて、書いてあるでしょ？ そのペンケース、理科室から帰るときにのこつてたから、当然うちのクラスのわすれ物だと思って、持ってきたの。で、名前、どっかに書いてないかなつて、あけて中を見たのよ。そうしたら、それ」

と、なぜか千佳が得意そうだ。

「でね、これ見て、桃ちゃんが、『これは、桃花と美雨ちゃんのことで、

桃花がわるくて美雨ちゃんはいいから、先生に言いつけるつて意味だ』

ずるすぎる。□をふさがれたような気持ちだった。

「だいじょうぶ、わたしたちであずかるだけだから。美雨ちゃんは心配しないで」

「じゃね」

「バイバイ」

玲央はバレエ部へ。里美と千佳は吹奏楽部へ。桃花は陸上部に、それぞれ散つていった。

それは愛海が入学のお祝いに買ってもらつたやつで、中のシャーペンやボールペンたちとおそろいなんだよ。大事なものなんだよ。だから、そんなことやめようよ。

つて、<sup>(2)</sup> 言えなかった。

言つたら、わたしが仲間はずれになる。直感でそう思った。

桃花の言う「遊び」は、遊びなんかじゃない。いじめという名前もつかないほど、ちっほけで……。

そう、子どものような悪意。

まえばあれほどグループからぬけたいつて、思っていたのに。同じぬけるのでも、自分の意志でぬけると、仲間はずれになるのでは、まったく意味がちがう。

もし「やめよう」つて言つたために、桃花のあの 悪意 をあびることになったら……。そんなこと、こわくて、考えなくなつた。

でも、そうだよ、みんなだつて、わるいひとじゃないんだから。ちよつ

つて言つてね。そういうふうにはか見えないでしょ？」

みんな、うなづく。

え？ え？ うそ。そのメモがそんなふうに読める？ ちがうんじゃないのかな……。でも、声のどでつかえて、でてくれない。

「でね？」

と、玲央がいたずらっぽく笑う。玲央はただでさえ美人なんだから、そんな笑い方をしたら、すみがあつて、すごくこわいよ。

**D** 「これが、そういう意味だしたら、ヤじゃない？ だから、メモを捨てちゃつて……」

「ついでに、ペンケースも、かくしちゃおうかな、なんて」  
と、千佳がいたずらっぽく笑う。

「え？ でも……そんなこと」

だめだよ、ちがうよ、やめようよ——言いたいの、声がでない。

桃花が顔をぐいつと近づけてきた。

「美雨ちゃんはその顔しなくても、だいじょうぶよ。ただの遊びだもん、こんなの」

「遊び……」

「そうそう。しばらくしたら、どっかからでてくるわよ。それに」

桃花がこわい顔をしてにらむ。いつもチャラチャラしている桃花のべつの顔が、そこにはあつた。

「美雨ちゃんはいいよねえ、マル、だもん」

とあずかつてメモの意味を愛海に確認したら、返すつもりなんだから。

そう思いこみたかつた。

週明けの学校。愛海のペンケースを桃花がかくしてから、三日たつた。

愛海におはよう、つて言われて、のどの奥に言葉がからみついて、うまく返事ができなかつた。

まだ、「見なかつたよね？」つて、きいてもらったほうがマシなのに、愛海は、ひとことも言わない。さがしているようすもない。

それつて、きつと気づいてる。

どこかで、桃花たちがかくしたんだつて、気づいたから、さがすのをやめたんだ。

それでも、せめてわたしには、なにかを言つてほしかつた。たよつてほしかつた、そうしたら！

じつはね、つて打ち明けられた。

わたしはただ、だまつているだけで罪と罰の両方を背負つているような気分だつた。<sup>(3)</sup>

ううん、ちがう。ちがうよ。そんな立派なものじゃなくて、自分がただ、卑怯者だけなの。ほんとうのことを言うこともできないでいる。

いま、どうしようもなく泣きたいのは、まちががなく、愛海。わたしじゃないはずなのに。

桃花がどうやってペンケースを愛海にもどすつもりなのか……。

そうしたらなにもさわがない愛海にしびれを切らしたのか、桃花がそれをだしてきて、さわぎはじめた。

「このペンケース、となりのクラスからまわってきたんだけど、だれの？」  
となりのクラス？　すごい無理やり。

すると、千佳がびくびくした顔をして、

「なに、それ、どうしたの？」

と、きいた。

「知らない。落とし物じゃない？」

「中になにがはいっているの？」

すると桃花が中をあけて、例のメモを読みあげた。

「えっと、なんか、桃花が×で、美雨ちゃんが○だから、先生に言う、  
っていうメモがはいってる」

玲央の舌打ちする音がきこえた。なんでそのメモをそんなふうに見るんだ、って言うような気がする。

ななめうしろでは、愛海がものすごくためらっているようにソワソワしている。

やがて、そろりと、立ちあがった。

「それ……わたしの。ありがとう、桃花ちゃん」

やっと桃花の目に満足そうな色がうかんだ。

「ええ！　そんなの？　ペンケース、なくなってたのに、気づかなかったの？」

「えっと……先週の木曜日からなかった」

「やだー、だったら言うってよ！　いっしょにさがしてあげたのに」

桃花はわざとかわいい声をだすと、男子のほうをちらっと見た。

そう、まるで自分がいちばんおどろいているようなふりをしながら。

「で、美雨ちゃんが○で、桃花が×って、なに？　先生に言いつけるって言うてる？」

そんなふうにしたら、クラス中に、だれがかくしたか、ばらしているようなものなのに。

「それ、桃花ちゃんのことでも、美雨ちゃんのことでもないよ」

「じゃあ、なに？」

桃花が笑うのをやめた。

笑っていない桃花は、愛海に対する悪意のかたまりみだった。なんで？　愛海のことかきらいだった？

「それは……」

「言えないの？」

(4) 愛海はほんとうに苦しそうだ。

「それは……ピアノの先生にわたすメモ。曲のことで、相談があつて……」

「は？」

桃花だけじゃなくて、玲央も千佳もあきれたように立ちあがった。

「……なにそれ？」

「ピアノ？　愛海が？」

桃花は、合唱コンクールの伴奏をひきうけている。それも、クラスでだれも弾けるひとがないから、ということ、同じ小学校だった指揮者の千佳に、無理やりひっぱりだされたのだ。

楽譜がむずかしくて、泣きそうだとこぼしていたことがある。

愛海が、だまっていた理由がやっとわかった。ピアノが弾けることを、ナイショにしていたかったんだ……。

「ふざけないでよ、石川さん」

やっぱり千佳がくっつかかった。

「弾けるなら弾けるって、どうして、伴奏者決めるときに、言わないのよ！」

愛海はますます小さくなって、いまにも泣くんじやないかと思つた。

「で、でも……わたし、伴奏なんて重大な責任のあるもの、とても無理だから」

消えいりそんな愛海を見て、わたしは、思わず立ちあがっていた。

「も、桃ちゃん、桃ちゃんが、うちのクラスでは、い、いちばん上手だと思つし、それにあの、上手とか、下手も大切だけど、愛海ちゃんじゃ、千佳ちゃんとの、なんっていうのか、コンピネーション？　だつて、きつとうまくいかないし、それに、やっぱり、桃ちゃんがリーダーだと安心するっていうか」

自分でなにを言ってるのか、まったくわからなくて、一気に汗がでて

きた。

(5) でも、桃花の鼻が急に高くなった。

「冗談じゃないのよね。ほんつとに、練習大変だしさあ」

「だから、桃ちゃんでもよかつたって、みんな思ってるよ。だからこのまま、桃ちゃんがいいなって。ね、みんな？　みんな、ちゃんと桃ちゃんと千佳ちゃんには感謝してるし」

情けないほど、細くて小さい声。なんの説得力もなくて、それでも必死だった。必死に笑って必死におせじ言つて、どうしても必死なのかもわからないほど、必死だった。

クラスみんなは、めんどくさそうにだけど、そうだそうだと言つてくれたので、なんとかその場はおさまつて、ぶじに愛海のペンケースはもどつてきた。担任の川上勝先生がはいつてくると、みんなガタガタとあわてていすにすわつた。

そのとき、愛海のすこしうるんだ瞳が、わたしのことをこっそり見た。

「あ・り・が・と・う」

口が、その形に動いた。

わたしだけにわかるような、ありがとう。

(6) その言葉は、あまりにも思いがけない贈り物のように、わたしの中に届いた。

その瞬間、ぶわっと、あふれてくる思いをおさえきれずに、泣きそつうになったのは、わたしのほうだった。

愛海を助けてあげられなかったのに。ほんとうはありがとう、なんて言ってもらう資格ないのに。

いまのフォローだって、それこそ自己肯定だ。愛海にだまっていた自分のうしろめたさが、言わせた言葉なのに。

それなのに、愛海はふたりだけの、ありがとうをくれた。

わたしは自分で思っている以上に、だれかとながりがたかったのかもしれない。

そこに差しこんできた、光のように思えた。

わずかな光かもしれないけれど、そのたよらない光を、むさぼるように感じていたかった。

だれかがつぶやいた。

「あ、ふつてきちゃった」

雨がふるのはひさしぶりだった。すぐ近くの空が青いから、にわか雨かもしれない。

わたしは先生を無視して、いつまでも窓の外の雨を見ていた。

愛海が大事そうに、ペンケースをかかえているのを、見ないふりをしながら、

放課後、いつものように愛海がひとりで帰ってしまうと、一日中、愛海の背中にねちっこい視線を送っていた桃花が、ちつ、と舌打ちした。

「ももかあ、もう、いいじゃない、やめとけば？」

わたしの口は、うまくまわってくれない。

「美雨が桃花のために、うまくやってくれたんだから、もう仕返しとかしない。愛海が桃花になにかしたわけじゃないでしょ。いい？」

玲央に冷静に言われて、桃花が瞬間ひるんだように見えた。

空気がびりびりと振動しているような気がする。

「部活行く！」

桃花は、派手な音を立てて、でていった。

わたしは力がぬけて、へたりこみそうになったのに、みんなは平然とした顔をして、そのままだまって部活に行ってしまった。

ふうつと、息をはいたら、やっと楽になった。息をするのをわすれていたみたい。

愛海の机。桃花がけりとばしていったから、激しくななめになっている。なんとかごまかせたのか、それともダメだったのか。

それさえたよりなくて、これだけいじょうぶ、なんてすこしも思えない。机とすをまっすぐに直す。さっきまでここに愛海がいた。

「いめんね」

そつと、机にふれる。

ただ、こわしてほしくなかった。わたしにとって大切なものを。こんなキリキリした苦しい思いは、もうしたくない。

(7) 大切な……そう思ったら、いままでもやもやしていたものが、ふいに形になって、あふれてきた。

里美がとがめるように言う。

「もういいって、なにがいいのよ。愛海のやつ、マジでうざい」

胸からズキツという音がした。

「合唱コンで、ピアノ弾くのは、かっこいいでしょ？ じゃあ、もういいじゃん」

すつかり、グループの一員になった千佳も言う。

「ピアノ弾けるのに、知らん顔してたことが、むかつくの。わたしが大変だって言うのをきいて、きつと内心バカにしたんだよ」

ペンケースをかくしたことなく、やっぱり桃花はなんとも思っていない。

そんな桃花を見ながら、玲央がピシヤリと言った。

「ペンケースだけでやめときな」

桃花はすごい顔で、玲央をにらんだ。でも玲央はまったくひるまない。「うちは、学級委員だしね。ちよつとした、いたずらのつもりだったからのはたけど、これ以上はまわりにばれる」

「玲央！ 裏切るの？」

「最初から味方も裏切りもないでしょ。あのね、桃花。マジで美雨に感謝しな。美雨があんなにあざやかにまとめるなんて、だれも思わなかったよ」

ほこ先がいきなりこちらにきて、

「え、え？ ううん、ぜんぜん、なにも、あの」

どうしよう。

わたしは愛海と、きちんと友だちになりたいんだ。

同じものを見て、好きって思える子と。

「ありがとう」と言ってくれた子と――。

(しめの ゆき 『美雨13歳のしあわせレシピ』)

問一 — 線(1)「すこしおどろいた」とありますが、何に「おどろいた」のですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。  
ア 愛海がこまっていることに対して自分も無関心ではいられなくなっていること。

イ 内気で引つ込み思案な自分が他人のために進んで親切をしようとしていること。  
ウ ペンケースが見つからなくて愛海が予想以上にうらそうにしていること。

エ いっしょに行つてあげると思つてもいかなかった言葉を口に出したこと。

オ あんなに大切にしていたペンケースを愛海がなくしてしまつたこと。

問二 本文中の[A]、[D]の会話文の話し手として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア 愛海                   イ 美雨                   ウ 桃花

エ 玲央                   オ 千佳                   カ 里美

問三 — 線(2)「言えなかった」とありますが、美雨のこのときの心情がわかる表現を、本文中から十三文字でぬき出して答えなさい。

問四 本文中の[ ]にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 消極的な                   イ おろかな                   ウ がんこな  
エ 無邪気な                   オ 明らかな

問五 — 線(3)「罪と罰の両方を背負っているような気分だった」とありますが、このときの美雨の気持ちとして最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア ペンケースの紛失をなかつたことにしようとする愛海の様子を見て、腹立たしく思っている。

イ 愛海を見ていてつらく感じ、何もしてあげられないことに対して、もどかしく思っている。

ウ 真実を隠し通すことができるか不安で、全てを打ち明けて楽になりたいと思っている。

エ 私がぐずぐずして決断できずにいるので愛海から信頼されず、悲しく思っている。

オ 桃花たちの卑怯な計画を憎んで、何とかしなければいけないと思っている。

問七 — 線(5)「桃花の鼻が急に高くなった」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

① 「鼻が急に高くなった」とありますが、それはどのような様子ですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア こうふんしている様子  
イ つかれきつた様子  
ウ 楽しげな様子  
エ 不満な様子  
オ 得意な様子

② 「鼻が急に高くなった」のはどうしてですか。簡単に説明しなさい。

問六 — 線(4)「愛海はほんとうに苦しそうだ」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア みんなを驚かせようと思つていたことが予想よりも早くばれてしまったから。

イ 本当のことを言うことで美雨を傷つけることになってしまふかもしれないから。

ウ 秘密にしておきたかったことをみんなに打ち明けなければならなくなつたから。

エ 愛海の本心を書かれたメモを一番見られたくなかつた人に見られたから。

オ 桃香の様子が愛海に対する悪意のかたまりのようだったから。

問八

——線(6)「その言葉は、あまりにも思いがけない贈り物のように、わたしの中に届いた」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 美雨は他人事としか思っていなかったのに、愛海から自分のフォローを感謝されたから。

イ 愛海は美雨のことを恨んでいたにもかかわらず、自己肯定のためにお礼の言葉を言ってきたから。

ウ 愛海のために何もしてあげられなかったのに、お礼を言われたことで、うしろめたさを覚えたから。

エ 美雨は自分の行動が愛海の支えになったということを知って、とてもほこらしくうれしいと思ったから。

オ 美雨は愛海を守れなかったと思っていたのに、感謝の言葉を伝えられ、温かい心のふれ合いを感じたから。

問九

——線(7)「大切な……そう思ったら、いままでもやもやしていたものが、ふいに形になって、あふれてきた」とありますが、このときの美雨の思いを六十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

受験番号

氏名

平成28年度 国語解答用紙

※12	※11	※10	※9	※8	※7	※6	※5	※4	※3	※2	※1
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

〔三〕				〔二〕			〔一〕																																																																																																											
問九	問七	問三	問一	問九	問六	問一	6	1																																																																																																										
<table border="1"> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> </table>																																														①	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																問二	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																A	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																え	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																る
	②		A	問七	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																		B	7	2																																																																																									
			B	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																	C	8	3																																																																																											
			C	問二																																																																																																														
			D	問八	問三		9	4																																																																																																										
		問四	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																問四	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																10	5																																																																													
		問五																																																																																																																
	問八	問六																																																																																																																

※欄は何も書かないこと

得点	※